

平成 19 年 3 月 30 日

H19 年度長臨界流体部会 新幹事・監事集会 議事録

日時：平成 19 年 3 月 19 日(月) 20:00～21:00

場所：京都ガーデンパレス

出席者(敬称略): 佐古 猛(静岡大)、船造俊孝(中央大)、山田和矢(東芝)、鈴木 明(産総研)、阿尻雅文(東北大)、佐藤善之(東北大)、葭田真昭(宇都宮大)、大島義人(東京大)、陶 究(日大)、児玉大輔(日大)、内田博久(信州大)、松田知子(東工大)、滝島繁樹(広島大)、岩井芳夫(九州大)、後藤元信(熊本大)、川尻 聡(竹中工務店)、平田洋介(東芝)、後藤敏晴(日立電線)、猪股宏(東北大)、辻 智也(日大)、岡島いづみ(静岡大)、鈴木章吾(リコー)、東 秀憲(金沢大)、松井 茂(JBB ステビア)、栃木勝己(日大)

議題：

1. 体制について

(1)体制は以下のとおりで、*印が各ワーキンググループのリーダー、サブリーダーは各グループのリーダーが必要に応じて決定することとした。

部会長：佐古(静岡大)

副部会長：船造(中央大)、生島(産総研)、山田(東芝)

ワーキンググループ

基礎物性：岩井(九大)*、辻(日大)、児玉(日大)、古屋(産総研)

分離・抽出：田村(金沢大)*、後藤(熊本)、佐藤(東北大)、川尻(竹中工務店)

反応・物性変換：大島(東大)*、葭田(宇都宮大)、平田(東芝)、後藤(日立電線)、松田(東工大)

材料製造：滝島(広島)*、阿尻(東北大)、若山(豊田中研)、内田(信州大)、陶(日大)

単位操作：鈴木(産総研)*、スミス(東北大)、乾(国土館大)、川崎(産総研)

監事：栃木(日大)、松井(JBB ステビア)

HP 担当：東(金沢大)

事務局：猪股(東北大)、横山(東北大)、辻(日大)、岡島(静岡大)、鈴木(リコー)

(2)幹事は重点分野の「産学官連携」、「国際協力」、「会員増強」、「広報」についても合わせて担当することになった。担当は以下の通りである。3 分野の責任者(リーダー)は副部会長、主体的に活動するのはサブリーダーが中心になることとした。

産学官連携：船造*、古屋**、滝瀧、葭田、川尻、川崎、後藤(敏)
国内・国際協力：生島*、後藤(元)**、岩井、阿尻、大島、スミス、松田
会員増強：山田*、内田**、鈴木、若山、平田、乾、陶
広報：田村*、佐藤、東、児玉

(上付*：リーダー、上付**：サブリーダー)

2. 今後の2年間の活動方針について

(1)各タスクチームの2年間の活動目標を以下の通りに決定した。

産学官連携・・・「実のある連携の促進」
国内・国際協力・・・「アジア地域での研究協力の促進」
会員増強・・・「会員サービスの向上、活動・財政基盤の強化」
広報・・・HPの適宜更新、ニュースレターの発行

3. 各タスクチームの具体的な取り組みについて議論し、以下のように決定した。

(1)4分野の活動案について、以下に記載したような意見が出た。

産学官連携

- ・部会員の専門分野、共同研究希望領域、研究業績リストの作成(簡単な資料)
- ・地域ブロックごとでの産学官交流会の開催

H19年度・・・東京：「最近の化学工学講習会」

「超臨界流体技術の最近の動向」講演会(仮)

東北：「東北地域産学官交流会」

*行事の内容は項目4に記載。

産学官連携の一つに部会プロジェクト提案があるが、部会としてどう対応するか？

プロジェクトや共同研究の実施にあたっては秘密保持契約が必要。部会としてどのように対応できるのか考えていきたい。

産学官連携チームで9月の秋季大会までに部会プロジェクトや共同研究の進め方についての原案を作成する。

(相手側が安心して任せられるような体制をつくる)

国内・国際協力

- ・国内の他の学協会との連携・情報交換の促進、サマースクールや学会での招待講演、合同研究発表会の開催
- ・韓国、中国、台湾、日本4カ国の国際会議の実現(第1回目の会議をH20年に開催)

アジアでの国際会議について、平成19年10月31日～11月2日に韓国で開催される第5回SuperGreen国際会議では超臨界流体技術は重要な研究テーマ。平成21年

に日本で開催するように働きかけることで、アジアを中心とした国際会議の実現を目指したい。

会員増強

- ・ 会員サービスの強化・・・講演会、交流会、文献調査報告集など
- ・ 学生会員の登録
- ・ 法人会員の増加・・・特典の明確化、組織的な対応

化学工学会で超臨界流体技術の研究を大きく行っていることを知らない人が案外多い。

さらなる PR が必要。

- ・ 他学協会と共催で講演会を行う
- ・ 学生会員に登録するように各先生が指導学生に働きかける、など。

広報

- ・ HP の更新・・・担当者：田村、東
- ・ ニュースレター・・・担当者：佐藤、児玉

年 2 回発行、広く部会員会から原稿を集める

HP 更新にあたり、情報があまりにも少ないのが現状。会員増強のためにも情報がほしい。

HP 公開する際には、内容を部会長に c.c.し、それから公開へ。

国内の研究事例を掲載して、その事例をクリックすると各研究室の HP へリンクできることを検討すべき。

Web で「超臨界」を検索すると超臨界流体部会がトップに出るようにすると効果的。そのために専門家を雇うことも検討してほしい。

HP 担当者が広報の活動案を作成し、取り組みを強化する。

各タスクチームのリーダーとサブリーダーが今年度の活動案を 4 月中に作成し、4 月末までに部会長に提案することとなった。

4 . H19 年度の行事予定について

各行事について、以下 に記載したような意見が出た。

(1)第 6 回サマースクール

日時：7 月 30～31 日

担当者：岩井（九大）

詳細未定

(2)化学工学会第 39 回秋季大会

開催期間：平成 19 年 9 月 13 日(木)～15 日(土)の 3 日間

開催場所：北海道大学

シンポジウム：「超臨界流体技術のニューフェイズ」(基礎物性部会との合同)

オーガナイザー：滝島(広大)、川崎(産総研)、松原(旭化成)、栃木(日大)

展望講演 4～5 件、優秀学生賞(1 日目)

(3)「超臨界流体技術の最近の動向」講演会(仮)・・・「東京地域 産学官交流会」

日時：平成 19 年 9 月下旬または平成 20 年得月下旬

場所：日本大学理工学部(御茶ノ水)

担当者：栃木(日大)

目的：超臨界流体部会活動成果集(WG 活動報告書 No.5)を用いる講演会。

ただし集客にも十分配慮した内容とする。

開催時期と講演内容について、(4)の講習会の時期と内容を考慮しながら再度検討する。

(4)「最近の化学工学講習会」・・・「東京地域 産学官交流会」

日時：平成 19 年 11 月～12 月

場所：東京地区

開催形式：関東支部主催、超臨界流体部会共催

担当者：船造(中央大)

目的：企業の研究者、技術者からの実事例の紹介に重点を置き、多くの参加者が得られる企画にする。

3 月中に講演候補者をピックアップし、可能かどうかを打診する。

場所について、参加者が 70～80 名ならば早稲田大理工・大久保キャンパスまたは日本化学会を会場にする。

講演会は 2 日間、講演数は 15 件程度で、項目ごとに大学の先生が概要を講演。例えば項目を 4 つ立てるとした場合、大学 4 件+企業 11 件で企業の研究や実用化事例を中心にする。

企業からの参加者が多いので、懇親会を設けることで名刺交換の場を作る。

産学官交流、会員増強につながるのではないかと。

化学工学会誌 8 月号「超臨界流体による材料製造」の特集記事を掲載予定。

特集記事の最後に講習会の案内を掲載すると集客につながる。

関東支部との窓口は船造、企画+講師選定は佐古、鈴木、川尻、大島、山田、岩井、

猪股で行う。

関東支部では基礎的な領域の講習会は別にあるため、本講習会では応用・実用例を中心にを行う。

(5)「東北地区 産学官交流会」

日時：秋～冬

場所：仙台

担当者：

目的：東北地域の産学官の研究交流、共同研究の促進

東北では産学官でコンソーシアム事業を行っているので、そこと連携することで集客ができる。

産総研または東北大で責任者を立て、講師メンバーを企画する。

取りまとめ役(仮)：佐藤(東北大)

(6)化学工学<特集>化学工学年鑑 2007

「化学工学年鑑 2007」(2007年10月発行予定)執筆者

「年鑑とりまとめ委員」 (佐古・静岡大学)

「年鑑執筆者」・超臨界流体

1. 超臨界流体全般 (佐古・静岡大学)
2. 基礎物性 (栗原・日本大学)
3. 分離・抽出 (田村・金沢大学)
4. 反応・物質変換 (葭田・宇都宮大学)
5. 材料製造 (内田・信州大学)
6. プロセス技術 (鈴木・産総研)

5月15日までに執筆者は佐古まで原稿を送付、5月18日までに佐古が原稿を取りまとめて化学工学会に提出する。

(7)教科書「新化学工学体系化」

担当者：船造(中央大)

出版社と打ち合わせ中

3月21日昼に編集委員会を行う。

以上